寄附金活用事業紹介 1
長沼ボート場クラブハウス管理事業
登米だより TOME LETTER

国内最高峰のボート場に見合うハイスペックな拠点施設が誕生

長沼ボート場クラブハウス

（右）最高の練習環境で技術を磨く佐沼高校ボート部のみなさん
（左）まずは9月の新人大会に向け練習あるのみ。目指すは優勝!

最新トレーニングマシンをはじめ設備が充実

国内で唯一の常設2000mコースを備え、過去にはオリンピック予選が開催されるなど、日本最高峰のボートコースとして知られる長沼ボート場。そのフィニッシュ地点を見下ろす高台に、ひときわ目を引くおしゃれな建物が立っています。オランダ風車がシンボルの長沼フートピア公園の風景とも調和するその建物こそ、昨年9月に誕生した長沼ボート場クラブハウスです。

外壁や内装に登米市産のスギ材をふんだんに使用した木造2階建てのクラブハウス。トレーニングルームを兼ねるミーティングルームには、ワットバイク、ロウイングエルゴメーターというボート競技には欠かせないトレーニングマシンが並びます。同施設は宿泊利用も可能で、ベッドが備え付けられた部屋やシャワー室も完備。キッチンには業務用並みのスペックを持つ厨房機器も設置されています。こうした施設内の備品すべてが、ふるさと応援寄附金によって整備されたものです。

生涯学習課長の日野幸紀さんは、「トレーニング、ミーティング、食、睡眠がワンストップで行えて、ボート場までも歩いてすぐ。日本屈指の長沼ボート場に見合う拠点施設が完成し、みなさまの寄附のおかげで中身の充実も図ることができました。今後はこの施設を大いに活用し、登米市のブランドイメージを高めていきたいですね」と意欲的です。

地元・佐沼高校ボート部のレベルアップにも

この日は長沼ボート場を拠点に活動する地元・佐沼高校のボート部が練習に訪れていました。創部から30余年を数え、過去にはインターハイ優勝を2回成し遂げた実績を誇る同部。現在は男子14名、女子11名が在籍し、久々のインターハイ出場を目指して練習を重ねる日々です。この夏は新しいクラブハウスで5日間の合宿も予定しているのだとか。

顧問の井上裕市先生は、「素晴らしいクラブハウスができましたので、全国各地から高校、大学、社会人の強豪チームがどんどん合宿に訪れるようになってくれるといいですね。そうすればうちの部のレベルアップになるのはもちろん、登米市の活性化にもつながるのではないでしょうか」と、大いに期待を寄せています。また、キャプテンの阿部快飛さんは、「新しくきれいな施設なので、合宿へのモチベーションが上がっています。寄附してくださった方々には感謝の気持ちでいっぱいです。今まであまり考えたことのなかったふるさと納税について、考えるきっかけにもなりました」と、目を輝かせて答えてくれました。

（上）ガルバリウムとスギ材のスタイリッシュな外観が印象的。
（左）木の香りが漂うクラブハウス内。最新鋭のマシンを使ったトレーニングにも熱が入ります。

寄附金活用事業紹介 2
迫・登米図書館
図書購入事業
登米だより
TOME LETTER

感性や情操を育む読書体験を通し文化的で豊かな暮らしをお手伝い

登米図書館

（上）ふるさと応援寄附金で購入された子ども向け絵本が並ぶ本棚。
（左）絵本の読み聞かせをする菊田あやさんと、右から大翔(ひろと)くん、真帆ちゃん、めいの由菜ちゃん。

子どもに読書の楽しさを伝える催しも多彩

登米公民館内にある登米市立登米図書館。周辺には子ども園、児童館、小学校、高校があり、夕方には学校帰りの子どもたちで賑わっています。週末には家族で来館する人も多く、楽しそうに本を選んでいる姿がよく見受けられるそうです。「本は子どもに不思議を体験させ、未知のものに触れさせるなど、大きな楽しみをもたらすもの。そして、生きる知恵や感性を身につけさせてくれる、成長に欠かせないものです」と話すのは、図書館司書の野家文恵さん。そのため同館では、春と秋には地域ボランティアによるおはなし会、1月には本を詰め合わせた福袋の貸し出しなど、子どもに本を好きになってもらうための多彩なイベントを実施しています。しかしながら、同館の蔵書は古いものが多く、決して読書環境が充実しているとは言えない現状だと言います。

登米市内には迫図書館、登米図書館、中田図書室という3つの図書館がありますが、いずれも図書購入のための予算が少なく、新規に購入できる本が限られています。「そこで大きな助けになっているのが、ふるさと応援寄附金です。当館では毎月約5万円分の寄附金を、新しい図書の購入費に充てさせていただいています。その内容は、一般書をはじめ、絵本や紙芝居、大型絵本など幅広い分野にわたっています。」と野家さんは説明します。

想いがこもった支援が読書環境充実の一助に

社会福祉法人登米市社会福祉協議会に勤務する菊田あやさんは、登米図書館を頻繁に利用する一人。登米市からの委託を受けて社会福祉協議会が実施する介護予防事業である『ミニデイサービス』というお茶飲み会の中で、図書館から借りた本を持参するんです。図書館に足を運べない方も多いので、とても喜ばれていますね。中でも好評なのは登米に関する郷土資料や写真集です」と話します。また、ご自身のお子さんを連れて来館する機会も多いそう。「子どもは新しくてきれいな本を好むので、寄附金で購入された本の存在はありがたいです」。

野家さんも「子どもたちが新しい本を手にして喜んでいる姿を見ると、こちらもうれしくなります」と顔をほころばせます。登米図書館の今後については、「みなさまからの温かい想いが詰まった寄附金を有効に活用し、子どもからお年寄りまで居心地が良い図書館を目指して取り組んでいきます。特に子どもたちの読書環境の充実に、いっそう力を入れていきたいです」と語り、引き続きの支援と協力を願っていました。

（右）貸し出し業務をする野家さん。「本は心の栄養です」。
（左）蔵書数は約3万冊。地域の歴史に関する郷土資料が豊富です。

（右）おままごとには創造力やコミュニケーション力を高める効果が。
（左）紙芝居に見入る子どもたち。目から入る情報にとても敏感です。

寄附金活用事業紹介 3
保育所等備品（教材・玩具類）購入事業
登米だより TOME LETTER

ふるさと応援の温かい心遣いが子どもの健やかな育ちをサポート

よねやま保育園

「健康な体」と「豊かな心」を養う保育を

四方を水田に囲まれた田園風景の中に立つ登米市よねやま保育園。1982（昭和57）年に設立され、2002（平成14）年に現在地に新築移転されました。自然に恵まれた大らかな環境の中、「『健康な体』と『豊かな心』を育む」という基本目標に沿った保育が実施されています。

2019年4月現在、0歳児から5歳児まで113名の児童が在籍。年齢ごとにクラス分けし、それぞれの成長に応じたきめ細かな保育を心がけています。「7時30分から18時30分までの在園時間の中で、タイムスケジュールに沿って、遊びやクラス活動、給食、お昼寝、おやつの時間などを設け、季節の行事なども織り込みながら、楽しく過ごしてもらっています」と語るのは、5歳児の「きりん組」を受け持つ及川真紀先生。この日、遊戯室のステージには、数日後に訪れる七夕に向けて竹飾りが飾られていました。

遊びを通して自己肯定感や思いやりを育む

こちらの保育園では、遊びやクラス活動に必要な玩具や教材を、ふるさと応援寄附金活用事業等によってまかなっています。その一つが、弾力性や柔軟性に優れたソフト積み木。「軽く柔らかいため、怪我をする心配がないのがいいですね。また、集団でのダイナミックな遊びができるのが魅力です」と及川先生。

具体的な遊び方としては、おうちやお店などを作ってのごっこ遊び、積み木を並べてその上を渡り歩くサーキット遊びなど、異年齢児が関わりをもちながらを楽しんでいるそうです。「創造力や協調性、自主性、四肢の運動能力を育むのに役立っています」と及川先生は言います。

おままごとセットや紙芝居もふるさと応援寄附金のおかげで購入が叶った備品です。「おままごとセットは食材が本物に似た質感で、男児女児問わず人気です。紙芝居は大人数で楽しめるので、何冊あってもいいですね。楽しいストーリーものだけでなく、食育など教育的効果の高い紙芝居も購入させていただいています」。

備品を使った多彩な遊びの中から、子どもたちの自己肯定感を伸ばしていきたいと、語ってくれた及川先生。「それに加えて、みんなで一緒に工夫し、試し、作るという経験を通して、相手への気づきや思いやりを持てる子を育んでいきたいと考えています」。

ふるさと応援の善意の気持ちが、未来を担う子どもたちの健やかな育ちに大いに役立っています。

（上）近隣には迫川が流れ、身近に自然に親しめる環境にあります。
（左）ソフト積み木で遊ぶ子どもたちと及川先生。外で遊べない雨天時などに重宝しているそうです。

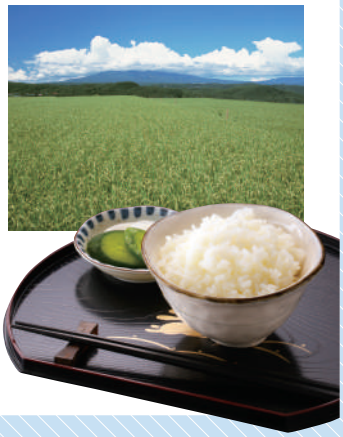
とめの自慢を
ピックアップして
ご紹介します!

聞かせて! 登米(とめ)自慢

1 環境保全米発祥の地

豊かな自然と安全・安心な食を未来へ引き継ぐため、自然との共存を目指した「環境保全型農業」を推進しています。「赤とんぼが乱舞する産地を目指そう」を合言葉にスタートした「環境保全米」の栽培は、登米市が発祥の地です。

農薬や化学肥料をできるだけ減らし、産地や栽培方法を証明する「栽培履歴簿」の記帳をはじめ、食味調査、DNA鑑定、残留農薬分析などを実施した安全で安心なお米です。



2 全国トップレベルの味と質「登米産牛」

登米市の「肉用牛」の生産量は東北随一であり、2017年の肉用牛市町村別産出額は約87億円で、本州で1位、全国で8位になりました。登米市で飼育されている肉用牛の多くは黒毛和牛で、一定以上の条件を満たした上質なものは、超高級ブランド牛肉「仙台牛」として出荷されています。

なお、平成29年度に開催された「第11回全国和牛能力共進会宮城大会」第2区部門において、登米市の畜産農家が日本一に当たる賞を獲得しました。

「仙台牛」とは

㈳日本食肉格付協会が行う「枝肉取引規格」という日本全国共通の基準に基づいたランク付けで、肉質等級「5」と評されたものだけが名乗ることができる、超高級ブランド牛肉「仙台牛」。その約4割が登米地域産です。

3 日本有数のボート場

8月には、「長沼はすまつり」が開催され、湖面いっぱいに咲くハスを楽しむことができます。

「長沼ボート場」は、全国でも4か所しかない国際A級コースの優れた競技環境を持つボート競技場です。全国各地のボート選手が、練習や強化合宿、大会競技などで訪れるほか、子どもたちをはじめとした市民が海洋性スポーツを気軽に楽しめる交流施設として、多くの方々に利用され親しまれています。

4 渡り鳥、ゲンジボタルが舞う豊かな自然

ラムサール条約登録湿地「伊豆沼・内沼」は多種多様な生物が生息する渡り鳥の楽園です。他にも、ゲンジボタルが群生する鱒淵川など貴重な自然が数多く残っています。

毎年7月上旬に見られる
ゲンジボタルの乱舞

5 宮城県初の森林セラピー基地

登米市は、森林資源も豊かで、総面積の4割強が森林で占められ、「杉」の産地としても有名です。

宮城県で唯一、森林セラピー基地として認定されている「登米ふれあいの森」の園内には、8つの散策コースが整備され、四季折々の景色を楽しみながらの散策は、森林が持つ癒しの効果を十分に体感することができます。

6 ユネスコ無形文化遺産「米川の水かぶり」

「米川の水かぶり」は、ユネスコ無形文化遺産「来訪神　仮面・仮装の神々」の来訪神行事であり、国の重要無形民俗文化財にも指定されています。800年以上の歴史と伝統を誇る火伏せ行事「米川の水かぶり」は、毎年2月の初午（はつうま）の日に東和町米川地区で開催されます。

地区の男だけが参加することのできる行事で、かまどのすすを顔に塗り、わらで作った水かぶり装束を身にまとい、大慈寺境内にある秋葉大権現に火伏せを祈願します。お神酒を頂いて神の使いとなった一行は、奇声をあげて各家庭の屋根に向かってバケツやおけの水をかけながら町を練り歩きます。地域の人たちは一行の纏っている装束からわらを抜きとり、それを自宅の屋根に投げ上げ火難除けのお守りとしています。

【お問い合わせ】
登米市総務部総務課
〒987-0511 宮城県登米市迫町佐沼字中江二丁目6番地1
TEL 0220-22-2091　FAX 0220-22-3328
http://www.city.tome.miyagi.jp　E-MAIL somu-somu@city.tome.miyagi.jp

宮城県登米市

登米市シティプロモーションロゴマーク

登米市ホームページ

発行日／令和元年7月